

## 全 議 事 録

会議名	令和3年度第3回山陽小野田市文化財審議会
開催日時	令和3年7月20日（火） 13時30分から16時
開催場所	山陽小野田市民館 第一講義室
出席者	磯部吉秀委員、内田陽三委員、徳重壽美雄委員 松永保美委員、田畑直彦委員、山本明史委員
欠席者	
事務局	長谷川裕（教育長）・岡原一恵（教育部長） 舩林康則（社会教育課課長）・若山さやか（歴史民俗資料館館長） 池田哲也（社会教育課課長補佐）・安藤知恵（文化財係長） 藤上あすみ（文化財係）

- 1 開会のことば
- 2 辞令交付
- 3 教育長あいさつ
- 4 委員・事務局紹介
- 5 議 題

（1）会長・副会長の選出について

会 長：内田委員、副会長：磯部委員に決定

会 長：それでは議事のほうに入ってまいりたいと思います。議題の2になるかと思いますが、山陽小野田市の指定文化財の現況と課題ということで、事務局のほうから説明をお願いします。

事務局：皆様に事前に配布させていただきましたA4の横の資料をご手元にご準備をお願いいたします。それでは本市の文化財の現状と課題についてご説明いたします。まず初めに、国の指定文化財では、浜五挺唐樋について今年度浚渫工事、ロクロ・招き戸の修復をいたします。現在保存活用計画等を策定していないため、破損した箇所  
の修復を実施するのみとなっております。同じく国指定の徳利窯こちらが煉瓦の外壁の剥離が一部すすんでいます。今注視をしているところです。

つづきまして、県指定文化財。昨年度下関市考古博物館の企画展で物見山経塚出土品と妙徳寺山1号経塚出土品の一部が展示されました。また今年度はいま皆様のお手元に配布しておりますチラシがございますが、大分県宇佐市にあります大分県立歴史博物館の開館40周年記念特別展で長光寺山古墳出土品が展示されます。このように調査並びに貸出が大変多く、広く知っていただくための活用が図れております。ただ、課題としては各出土品の鉄製品の保存状態が良くないものもございます。この度、別府大学の調査研究の対象として、長光寺山古墳出土品を貸し出す予定としております。指定文化財A4横の紙の2枚目をご覧ください。

市指定文化財です。こちらでは現地説明板の板面張替を仁保の上古墳、岩崎寺観音

堂罎口、塩浜石炭焚滓堆積地の3箇所を実施をいたしました。また、埴生にあります糸根の松原は枯れている松を伐採しておりますが、詳細な調査を実施していないため、原因の追及には至っておりません。且の登り窯こちらは昨年度、窯を覆っている屋根を一部修復いたしました。5年計画で現在修復中であり、今年度の修復工事はすでに完了をしております。後ほど現地で詳しくご説明をいたします。

24番目でございます、市唯一の無形民俗文化財である古式行事はコミュニティ助成事業で道具の一部を更新いたしました。コロナ禍で昨年度披露ができておりません。以上現在の市の指定文化財、県国それぞれの活用と課題でございました。

また指定ではございませんが、本市の古文書も何点か寄託ならびに寄贈の手続きを所有者と交わり、翻刻したものを歴史民俗資料館の企画展や講演会で紹介するなど、活用を図っております。以上でございます。よろしくお願いいたします

会 長：それでは、今事務局のほうから説明がありましたが、今年度は国史跡の浜五挺唐樋の浚渫工事などを実施されるようですが、追加でもう少し詳しく説明のほうお願いできますでしょうか。

事務局：では引き続きまして、浜五挺唐樋のもう少し詳しい説明をとのことでしたので、皆様の本日お配りしております中の資料1をご覧ください。

浜五挺唐樋は周防灘干拓遺跡として山口市名田島南蛮樋と一体で平成8年に、国の指定史跡となっております。指定後には山口市は南蛮樋保存管理計画や整備基本計画を策定し、その計画に沿った事業をすすめておられます。一方で浜五挺唐樋は計画策定をしておらず、破損した箇所を都度修復していくことに留まっております。

お手元の資料の中の過去の修復一覧をご覧ください。概ね8年ごとに木製部分ロクロ・招き戸を中心に浜五挺唐樋の保存管理をまいりました。汚泥を除去する浚渫工事は平成21年度以降実施をしております。本日現地でも説明をいたしますが、汚泥がかなり堆積をしております。その堆積した汚泥に招き戸が埋まってしまっており、原型をとどめておりません。今年度はこちらの浚渫工事を実施後、ロクロ・招き戸を取り替える予定にしております。

先程計画策定の話をしていただきましたが、個別の保存管理活用計画策定に向けてたまたま準備を進めております。9月には国の文化庁調査官を現地に招聘し、今後の進め方についてご指導いただく予定となっております。今後も委員の皆様からも浜五挺唐樋の保存及び活用についてのご意見をいただければと考えております。以上でございます。

会 長：ありがとうございます。今、浜五挺唐樋について説明を追加していただきましたが、合わせてになります。先ほど説明がありましたが、山陽小野田市の指定文化財の現状と課題ということについて、何かご質問等ございますでしょうか。

何かご意見等あれば。また後程、唐樋の方、それから且の登り窯の方も視察があると思いますので、またその折でも結構ですので、質問があればお答えするでよろしいでしょうか。

委 員：はい。

会 長：それでは、議題の3の方になりますが、山陽小野田市ふるさと文化遺産窯のまち

(仮称)の今後の登録に向けて、という方の議題にうつります。事務局の方から説明をお願いいたします。

事務局: それでは私の方から説明をさせていただきます。皆様に事前にお配りした窯のまちというタイトルが入ったものをお手元をお願いいたします。

この表紙の写真なんですが、全くこれで行くわけではありませので、もっとこういった写真を載せた方が良いという写真がありましたら、是非ご意見ををお願いいたします。

では1ページ目をめくっていただきまして、まずは序章ということで山陽小野田市の窯業の歴史をまとめたページが2ページございます。須恵器から且の皿山、セメント、現代のガラスの各時代ごとの流れをひとつの表にまとめております。次のページの空白になっているところですが、小野田でここまで長い間、焼き物が盛んに行われた要員は小野田の土が関係しているのではないかとこのところをもう少し詳しくここで分析をして、右ページのところに入れさせていただき予定にしております。ページをめくっていただきまして、章立ての第1章まずは須恵器・古墳時代の焼き物というタイトルです。ここでは、項目を二つ挙げておりまして、須恵器から土師器へ。この土師器の特徴と須恵器の特徴を図表化して、表しております。須恵器がなぜここで焼かれるようになったのか、その辺りの経緯も含めて紹介しております。次のページの小野田の須恵器というところはもう少し詳しく須恵器の内容を説明しております。コラムの中では、塚の川古墳が、これらの当時の生活に深く関わっているというところで挙げさせていただいております。次のページで章が変わりまして、第2章が且の皿山。且の皿山の始まりから皿山の製品が全国に展開していった内容を紹介しております。ただ、写真等が中々つんでおりませので、何かこの写真が良いのがあるよとかいうものがありましたら、ぜひご紹介をください。一番下の括弧の中なんですけれども、陶土の作り方っていうところで、こちらが大変私自身が興味深い内容で、オロとバックがどのように実際作られていたかっていうのを、聞き取りの調査の結果で挙がっている資料がありましたので、そちらを合わせてご紹介しております。次のページについては、そのままの流れで、製陶業の変遷について、その後どういうふうに製陶が衰退していくんですけども、その辺りの流れも上げております。コラム3には、現在唯一、その当時からの製陶業を続けていらっしゃる松井製陶所をご紹介する予定です。次のページの皿山の変遷略図については、こちらの内容が変わる予定ですので、今、イメージとしてこういう形の流れをこちらで紹介する予定にしております。続きまして章が変わります。第3章の近代産業と小野田の窯業ということでこちらについてはセメントや硫酸の製造に合わせて、小野田の窯業が発展したという歴史を近代産業というくくりで紹介をさせていただいております。先ほど松永先生からも同じようなお話でいただいておりますが、まずセメント製造会社と窯の変遷ということで、こちらぜひ松永先生にご意見をいただきたいんですが、セメント会社で使われていた、窯の歴史をご紹介しております。続いてページをめくっていただいて、日産化学工業当時の舎密製造会社の誘致から硫酸瓶の製造が始まったということで、こちらの流れ

を紹介しております。それからページをめくっていただいて、最後の硫酸瓶の赤色の秘密ということで釉薬、石見地方の島根県の話などもう少し話を盛り込んで紹介をする予定です。最後には町の景観に溶け込む硫酸瓶ということで、山陽小野田市の中にはまちづくりの観点から硫酸瓶を様々なところで使っております。それらをより皆様知っていただくように、地図を載せたりして紹介するページにする予定です。最後のところが旦の皿山の風景ということで、当時の旦の地域でとても盛んであった、製陶業が今も残っている光景がありますので、こちらをまとめて紹介をする予定です。最後になりますが、第4章で現在のガラスによるまちづくりをご紹介します。なぜガラスのまちになったのか、縁のある竹内傳治先生の紹介。それから、山陽小野田市のガラスへの取組。現在行っているガラス展や、造形作家さんの紹介、それとページが変わりまして、あとは様々な公共施設でガラスの作品を展示しておりますので、そのご紹介と、最後のコラムには、それぞれ市民のみなさんと一緒に造ったガラス作品の制作場所等をご紹介します。以上すみません事務局の方から簡単ではございますが、今の現段階での窯のまちの資料の説明をさせていただきました。ぜひ皆様からのご意見をいただければと思います。以上でございます。

会長：はい、ありがとうございました。事務局より説明のほうをしていただきましたが、委員さんの方から何かご指摘等ありますでしょうか。案ということでこれから中の方をということではございますが、現段階であればお願いいたします。

委員：ちょっと確認ですけど、ガラスのところですね例の勘場屋敷の隣の新藤さんの家の入口のところにあれは硫酸瓶ですかね。入口のところにガラス瓶が塀の代わりにされておりますね。あれは硫酸瓶ですかね。確認ですが。

事務局：すいません、現地を確認させていただいて、また徳重先生に話させていただこうと思います。私も現地をよく存じ上げておりませんので。

委員：ガラス瓶の歴史はどうなっているのか、ただあるだけでわかりませんじゃ。そのあたりを確認しておいた方が良いんじゃないかなと思います。

委員：聴いたところによりますとあそこのところとそれから郷という地区がありますよね。あのあたりも瓶垣がたくさんあるんですよ。あれはあの、帝窯というんですかね帝国窯業がああたりにあったんです。工場が。今で言ったら西の郷という団地があるんですけども、あそこに大きな工場があったんですよ。そういったところをあそこにやられたと聞いたんですけど。こっち側にある物は、高泊にある物はその昔言った帝窯、帝国窯業の硫酸瓶をもらって塀を作ったと聞いています。

委員：ということは、小野田市にあるガラスの歴史も古いということですね。

委員：あれは割と歴史は浅いと思います。あそこの帝国窯業は。

委員：今、徳重先生がおっしゃった副会長がお答えになった通りなんですけど、小野田の歴史をたどりますと、大きく旦地区を中心にした箇所とくし山地区を中心にした場所と、それから郷地区。今先生がおっしゃったのは郷地区の帝国窯業ですね。これは実は硫酸瓶と、焼酎瓶に大きく分かれるのですが、そのうちの焼酎瓶の方が多く作られました。というのも帝国窯業の親会社というのが、日本有数の酒造会社。し

たがってその造った焼酎をあそこの焼酎瓶を使って全国に送るような仕組みを作ったということでございます。

会 長：はい。ありがとうございます。という風な市内に残っている、それから各家庭にこういう資料もですね、できればという風に思います。ほかにご質疑がございすか。

委 員：ちょっと拝見させていただいて、疑問というか、謎だなと思うのが、須恵器と硫酸瓶の間がものすごく時代の感覚が空いているなという事。空白期が長いということですが、これはただ、その間の遺跡が見つかっていないだけなのかもしれませんが、触れられてもいいのではないかなと思いました。あともう1点須恵器の特徴なんですけれども、制作方法の中で蹴ロクロを使って回転させながらと書かれていますけれども、最近の研究では蹴ロクロは豊臣秀吉による文禄慶長の役の時に、韓半島から導入されたと考えられていまして、それ以前は手で回すロクロだったんじゃないかっていうこと。ロクロそのものがでてきたら解決するんですが、作った製品とロクロの目が合わないやつしか出てきません。よって、この個所はロクロを使っていたことは間違いないんですが、蹴ロクロと言ってしまうと何とも言いえない部分が出てきますので、ロクロぐらいにとどめておいた方が良いのかなという風に思います。その他にもですねいくつか細かい点があるんですけれども、時間も限られていますのでまた後で事務局に申し上げます。

会 長：はい、ありがとうございます。事務局の方、よろしく申し上げます。他にご質疑等ございすでしょうか。表記のほうについては、私もちょっとまだまだ、整理していかなくてはいけないのかなと思います。小野田市史が参考資料となっているのが市史となっていたりですね、標記の仕方がばらばらになっていたりするので、そのあたりはこれから、おそらく整理されるんだと思います。ほかにご質疑等ございすか。よろしいですかね。それでは、今後この登録に向けて、第2回の文化財審議会で最終案がはかれると思います。その第2回が開かれる前に、各委員さんも今あったように何かあれば事務局の方にお伝え頂いてですね、いい案が。そして最終的にはですねと思います。ただ事務局の方で大変だと思いますが、ご準備をお願いできればと思います。それでは6の方のその他の方に行かせていただければと思います。事務局の方から何かございすでしょうか。

事務局：特にございせん。

会 長：委員の皆様から何かご意見等ございすでしょうか。それでは以上で議事は終わりました。どうもありがとうございます。進行の方を事務局にお返しいたします。

事務局：内田会長、磯部副会長、ありがとうございます。この後は現地視察に参ります。2台公用車をご用意しておりますので、3名ずつ乗り合っていていただきます。まず、浜五挺唐樋に行きまして、そのあと登り窯に行かせていただく予定です。よろしくお願いいたします。